

〔資料〕

親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討 —親性の概念明確化に向けて—

大橋 幸美¹⁾ 浅野みどり²⁾

要 旨

従来、親としての役割意識や子どもへの感情、親と子の関係性を表す用語として、「母性」や「父性」が用いられてきたが、これは性別役割分業観に基づくものである。近年、性別役割分業観にとらわれない用語として「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親（性）準備性」「次世代育成力」が用いられるようになった。しかし、それぞれの概念は、不明瞭で社会の認識は低い。そこで本研究では、「親性」を親の特性として、1) 人間としての基本的欲求に基づき、すべての人がもっているものである、2) 女性と男性に共通するものである、3) 自己に対するものと、子どもに対するものとの2方向性で捉える、4) ライフステージとともに発達していくものである、という視点で捉え、「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親（性）準備性」「次世代育成力」の各用語について国内の文献から、上記の4つの視点との共通性や相違点を検討し、親性の概念を、「親性とは、すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、本文では他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される。」と定義した。

キーワード：親性、育児性、養育・養護性、親（性）準備性、次世代育成力

1. はじめに

平成19年の合計特殊出生率は1.34¹⁾となり、前年1.32よりもわずかに上昇したが、少子化問題は、依然として日本社会の基盤に関わる問題である。その背景には、親になることへの不安感や育児に対する不安や育児の困難さも関係していると考えられている²⁾。また、近年増加する児童虐待の原因として、親としての未熟性や育児不安が挙げられ³⁾、周産期から密接な関わりを持つ看護職による虐待予防のための早期発見と早期対応の必要性が指摘されている⁴⁾。そのためには、「親になることを母親と父親はどのように受けとめているのか」「親はどのような過程で親としての満足感を得ているのか」「子育て

についてどのような不安や困難感を強く感じているのか」を明らかにすることは、看護の前提としての対象理解を深め、新たな支援を創出する可能性があると考えられる。

核家族の増加と女性の社会進出が進み、男女共同参画社会の実現が求められている現代社会において、男女が、基本的に相当の権利と責任を果たす存在として、公平に社会に位置づけられるという考えのジェンダーイクイティ (gender equity)⁵⁾と、女性性 (女らしさ) と男性性 (男らしさ) を合わせもつアンドロジニー (心理的両性具有: psychological androgyny)⁶⁾の視点からも、親となることを男性・女性にも共通する性質として理解することが重要である。また、ひとり親家庭やステップファミリーも増加し、多様化する家族形態の中で性別役割分業観にとらわれない親の特性に着目する必要がある。

1) 名古屋大学大学院医学系研究科

2) 名古屋大学医学部保健学科

親としての認識や感情や能力を表す言葉として、従来「母性」や「父性」という言葉が用いられてきたが、これらは家長制度を中心とする歴史的背景をもち、女性性・男性性という性別役割分業に基づいた概念である⁸⁾。しかし、現在社会の子育ての状況を考えると「母性・父性」という用語で親としての特性を捉えることが疑問視され、近年それらに代わり、「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」の新しい用語が使われている。これらは、子育てに関わり、性を問わない親としての役割意識や子どもへの感情などの特性という共通した意味をもつ用語である⁹⁾¹⁰⁾。しかし、それぞれが様々な学問分野における対象者や使用目的が異なるものであり、また、概念が不明瞭なものもあり、一般社会での共通認識度は低いと考えられる。そこで、著者らは、親となることを最も的確に表現し、歴史的にも最も古く、対象者も幅広く、なおかつ親しみをもつ用語である「親性」について着目し、「親性」の概念を本稿において明らかにしていきたいと考える。概念を明らかにすることで、性別役割分業観にとらわれない現在の親の特性理解につながり、母親だけではなく父親をも含めた家族に対する看護支援の示唆を得ることが可能になる。

II. 「母性」「父性」をふまえた「親性」へ

これまで「母性」や「父性」は、生物学的性差や性別役割分業を基盤とした特性と考えられてきた。広辞苑¹¹⁾によると「母性とは、女性が母としてもっている性質。また、母たるもの。」「父性とは、父としてもつ性質。」と表現されている。Deutsch¹²⁾は、「母性は、社会学的・生物学的感情統一としての母の子に対する関係を示すものである。」と定義している。「父性」に関して広辞苑以外は明確な定義はされておらず、「母性」との対比における対立的二元論で語られるか、権威とか権力、あるいは規範性といった父権的社会における家長のイメージを引きずって考えられることが多かった。歴史的に見て、

戦前の我が国の社会では家庭における性別役割分業が、はっきりした形で確立されており、伝統的に男性・女性はそれぞれの性に属する役割を規定しそれを当然のこととして遂行し、男は仕事、女は家庭という考えが多くの人によって支持されてきた¹³⁾。しかし、核家族化の増加と、女性の社会進出が進む現代社会において、男女共同参画社会¹⁴⁾の実現が望まれており、ひとり親やステップファミリーの増加による多様な家族形態からも、伝統的性別役割分業観にとらわれない生き方や子育てを考える必要が訴えられている。さらに親の特性や個人の親役割観の変化、子育て能力の研究が進むにつれ、子どもを慈しむ気持ちや能力は、女性と男性に共通するものであり個人差に還元されるところが大きいことがわかってきた¹⁵⁾。そして、子どもを養育する行動や感情のいずれもが、生物学的性によって生来的・固定的に決まっているのではなく、どのような立場で子どもと接するか、具体的・日常的な世話役割をするか否かによって規定されるということが明らかにされ、親の役割意識や感情の差については、その条件分析的研究として注目されている¹⁶⁾。

これらのことから「母性」「父性」に代わる、新しい用語の提言が求められ、性差を問わない、女性と男性に共通する親役割意識や子どもへの感情を表現する用語として、「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」が用いられている。しかし、それぞれの概念に関しては、不明瞭な部分が多く、社会的認識としても低いものである¹⁷⁾。

著者らは、「母性」「父性」を全否定するのではなく、母親と父親に共通する親としての役割意識や子どもへの感情などの特性に着目し「親性」という用語で捉え、次に概念明確化に向けて基本となる視点について、考えていくことにした。

III. 著者らが考える「親性」概念の視点

Murray¹⁸⁾は、人間の基本的欲求として、養護欲求が存在することを明らかにし、養護欲求について「①感情、情緒：憐憫、同情、情け、やさしさ、②性格特性と態度：養育的、同情的、憐れみ深い、優しい、母らしい、保護的、援助的、父らしい（温情的）、めぐみ深い、博愛的、甘い、情けある、慈善的、やさしい、寛大な、とがめだてしない、寛容、③行為：不幸なもの、悲しみにあるものに特に気をくばること、子どもや動物と一緒にあって愉しむこと、哀れみの情をおこすこと、時間や精力や金を気前よく使う、ある者が弱さを示すといっそう愛着を感じること、涙で心を動かされること。」という特徴を述べている。そして、人間は、性別や親であるかどうかを問わず、その欲求に基づき生活し行動している。つまり、人間としてすべての人が、子どもや弱い人に対して相手を慈しみ愛情をもって接するという特性がある、と考えられている。

親役割について、Rubin¹⁹⁾やWalkerら²⁰⁾が母親の Maternal identity を、自分自身の概念と児に対する概念という2方向で捉えている、父親についても同様に、Grossmannら²¹⁾が Autonomy (自律性) と Affiliation (親和性) という2つの要因との関連について述べている。つまり、親としての認識は子どもへの一方的なものではなく、自分の感情、思考、信念などをどのように認知しているかの自己への方向性を含む2方向性で捉えていくことが重要であると述べている。

人間を生涯発達するという視点で捉える生涯発達理論では、人間の成長過程の中で、妊娠・出産・育児期以降も親としての役割を獲得して成長すること²²⁾が述べられている。親の特性を捉えるためには、養育を必要とする子どもの親だけではなく、高齢者となった親、将来親となる人、不妊問題を抱える人、片親家族の人等、様々なライフサイクル、ライフステージにある人をも対象とするべきだと考える。

これらの先行研究をふまえ、著者らは、親性の概念を考える上で重要な視点は、1) 人間としての基本的欲求に基づき、すべての人がもっているものである、2) 女性と男性に共通するものである、3) 自己に対するものと、子どもに対するものとの2方向性で捉える、4) ライフステージとともに発達していくものである、と考える。

次にこの4つの視点に着目して、親性の概念の検討を進めた。

IV. 研究方法

1. 研究の目的

「親性」とそれに類似する用語に関する文献検索を行い、先に挙げた4つの視点を重視して「親性」概念を明らかにすることを目的に、各用語との共通点・相違点を述べていくこととする。

2. 文献検索

検索については、親と子育てに関連し、性別役割分業観にとらわれないという共通した意味をもつ「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」をキーワードに CiNii (国立情報学研究所論文情報ナビゲータ NII Scholarly and Academic Information Navigator) と医学中央雑誌(以下、医中誌)を用いて検索を行った。それ以外にも、育児に関わる学問分野の書籍から先に挙げたキーワードについて記載されている文献を追加することにした。

3. 文献検索の結果

CiNiiと医中誌による「親性」の検索結果は、CiNii 97件・医中誌 25件、「育児性」は、CiNii 12件・医中誌 10件、「養育性」は、CiNii 8件・医中誌 4件、「養護性」は、CiNii 38件・医中誌 8件、「親(性)準備性」は、CiNii 27件・医中誌 17件、「次世代育成力」は、CiNii 28件・医中誌 9件であった。遺伝学用語として用いられている「親性」の文献と、抄録と会議録、他の用語との重複文献は削除した。さらに、CiNiiと医中誌の検索からは検出されなかつ

たが、上記のキーワードについてその概念が記載されていた書籍を何冊か追加した。その結果、表1に示すように、用語では「親性」が31件と最も多く取りあげられていた。次いで「養護性」が25件であった。多領域の学問分野で子育てに関わる新しい用語として「親性」に着目していることが分かった。学問分野別に見ると、看護領域では、「親性」が11件で最も多く取りあげられ、次いで「育児性」が7件であった。特に看護学領域では、妊娠・出産・育児期の親に密接に関わることから「親性」に強い関心をもっていると考えられる。

次に、それぞれの用語についての概念と著者らが考える「親性」概念の4つの視点との共通点、相違点について提示していくこととする。

V. 結 果

1. 用語の検討

「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親（性）準備性」「次世代育成力」の用語について、文献を提示した。概念提唱者と年代、文献の種類、各用語の意味、研究者らが考える「親性」概念の視点との共通点について表2に示した。本稿では特に概念が提示されている文献に焦点をあてたため、結果と考察に挙げた文献では書籍が多く含まれることとなった。

1) 「親性」について

歴史的に最も古くから使われている用語である。概念の変遷についてみると、与謝野晶子²³⁾は、1921年にはじめて「親性」という言葉を用い「形と作用において父と母に分かれていても、親としての精神は男女同一であって、等しく人間性の表現ですから、両者を統一した『人間性表現』もしくは『人間的活動』とをいう言葉を持って称すべきものと思います。教育の進歩に由って、唯だ益々それが動物的の親性から、人間的の親性へ醇化されていくばかりです。」と述べている。また汐見²⁴⁾²⁵⁾は、1989年に「『父親らしさ』『母親らしさ』を強調するよりは、父親も母

親も区別なく、親であることとその立場を自覚し、その役割を正しく遂行することを強調することが、より積極的な意味を持ちうるのではないか」という考えのもと、「父性」「母性」に代わる「親性」という用語を提唱し、1997年には、「子どもの基本欲求を上手に満たしてやる愛情、態度、能力が含まれているだけでなく、夫婦でそれをうまく分担する能力も含まれていると考えてよい。」と述べている。

糸魚川²⁶⁾は、「生物的な性にとらわれない親としての一般的な性質をいう。」とその概念提示をし、さらに、「親性の回帰とは、人類の成人が生物的な性に拘束されていても、その拘束にとらわれずに両性の行動と役割を担うべき本来的な方向性をいう。また、親性のひとつの要件は繁殖活動であろうが、親性は実子の保育、保護に限らず、弱い立場の仲間にたいする保護、攻撃抑制、受容、理解を基盤とすべきである。」と述べている。さらに、「親は、単に子育てを担う存在だけでなく、同時に一人の女性・男性としての関心や達成への意欲、動機も持っており、個人としての発達も生涯発達という視点から見ていく必要がある。」とも述べている。

谷向²⁷⁾は、「『親性』とは、親として育ちゆく命である子どもを慈しみ育もうとする心性であり、性別や年齢に関係なく、また子の親であるかどうかに限らず誰もが持つ特性であり、その豊かさは個人差によるということである。親になることは人に大きな変化をもたらす。だれもが親になったときは初心者で未熟だが、子どもを育てる経験を通して徐々に親らしさを身につけていくものである。しかし、親性の発達は親になって始まるものではない。親になる前から、さらに子どもが一人前になった後も続く。人間は発生から死に至るまで発達し続けるというのが生涯発達の考えであるが、親性の発達も生涯にわたり続くものなのである。」と述べている。

林²⁸⁾²⁹⁾も、親の発達を発達段階的に捉えること、生涯発達の観点から捉えることの必要性を強調し、ジェンダーフリーの概念としての親性について、「親が、自分の子どもを養い育てようとする性質と

表1. 「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」の文献検索結果

用語		親性 31件	育児性 15件	養育性 14件	養護性 25件	親(性)準備性 23件	次世代育成力 12件
学問分野	看護学	11	7	3	5	2	2
	医学	6	2	7	0	6	2
	教育学/心理学	10	5	3	17	9	8
	福祉/保育学	1	1	1	3	4	0
	家政学	1	0	0	0	0	0
	社会学	1	0	0	0	1	0
	人間文化学	1	0	0	0	0	0
	文化情報学	0	0	0	0	1	0

表2. 「親性」とそれに類似する用語の検討 著者らが考える概念と共通する内容

用語	年	提唱者	種類	視 点	意 味
親 性	1921	与謝野晶子	書 籍	人間的表現・人間的活動	親としての精神は男女同一等しく人間性の表現である
	1989	汐見 稔幸	総説/概説	親であることの自覚と役割を強調	親であることと、その立場を自覚し、その役割を正しく強調することが、より積極的な意味を持ちうる
	1990	糸魚川直祐	書 籍	生物学的な性にとられない親としての一般的な性質	人類の成人が生物学的な性に拘束されていても、その拘束にとられずに両性の行動と役割を担うべき本来的な方向性をいう実子の保育、保護に限らず、弱い立場の仲間に対する保護、攻撃抑制、受容、理解を基盤とすべき
	1998	鮫島 雅子	原 著	「親性」と「育児性」を区別して提示	生物学的性差を認めた上で、両性ともに、親となることにより発達する個人の人格的特性
	2003	谷向みつえ	書 籍	誰もが持つ特性であり、その豊かさは個人差による	親として育ちゆく命である子どもを慈しみ育もうとする心性 性別や年齢に関係なく、子の親であるかどうかに限らない
	2005	林 昭志	原 著	親の発達を生涯発達の観点から捉える事が重要	親が自分の子どもを養育しようとする性質
育 児 性	1982	大日向雅美	書 籍 総説/概説	性差を超えて子どもを育む視点	各自の個性と相手の人格とを尊重した男女(夫婦)関係のもとで、新しい家族の誕生を迎えることが望ましい
	1998	鮫島 雅子	原 著	「親性」と「育児性」を区別	生物学的性差を問わず、個人の育児能力を統合するもの、そして、親から子どもへの方向性がある
養 育 性	1998	松岡 恵	書 籍	対人関係の基本的な能力を基礎 他者へ共感的理解	子どもに対する養育行動や養育態度などは母親と父親に共通の概念 妊娠・分娩・出産の経験を通じて発達
養 護 性	1996	小嶋 秀夫	原 著 書籍	ナーチュランス(nurturance)相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能という視点	発達途上にある対象に、栄養・支援・励ましなどを与えることを通じて、その発達を促進させる。自分よりも幼い子に限らず老人や落胆している人、ペットや植物をかわいがったり、世話をしたり、力になろうとする気持ち。
親(性)準備性	1983	岩田 崇 井上義郎	原 著	プレ親期(青年期)の重要性	望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期における、価値的・心理的態度や行動的・知識的側面の準備状態
次世代育成力	1991	原 ひろ子	書 籍	種としてのヒトが各社会単位ないしは、種全体として次世代を育てていく能力確保の重要性を強調	「男性による」とか「女性による」という対立を超えて、人々が共に考え、共に尊重し合いながら、次世代へものごとを引き継いでいく 家族を超えた人と人との絆の中で子どもが育つ

して定義される。」と述べている。

2) 「育児性」について

大日向³⁰⁾³¹⁾が従来の「母性・父性」に代わる性差を超えて子どもを育むという視点を大切にする概念として「育児性」を提唱しており、「育児が性役割分担や父性・母性にかかわる既成の価値にとらわれることなく、各自の個性と相手の人格とを尊重した男女(夫婦)関係のもとで、新しい家族の誕生を迎えることが望ましい。」と述べている。

鮫島³²⁾は、「親性」と「育児性」を区別して考えて

おり、「『親性』は、生物学的性差を認めた上で、両性ともに、親となることによる発達する個人の人格的特性。『育児性』は、生物学的性差を問わず、個人の育児能力を統合するもの。そして、親から子どもへ方向性のある概念。」と規定している。

3) 「養育性」について

松岡³³⁾は、「子どもに対する養育行動や養育態度などは母親と父親に共通の概念としてとらえており、『他者への共感的理解』という、親になる以前に形成される対人関係の基本的な能力を基礎として、妊

娠・分娩・育児の経験を通じて発達する。」と述べている。

4) 「養護性」について

小嶋³⁴⁾³⁵⁾は、「動詞“nurturance”には、発達途上にある対象に、栄養・支援・励ましなどを与えることを通じて、その発達を促進させるという意味がある。そのような行動・構えに慈しみ育む心と技能があるという考えで『養護性』と表現している。発達途上にある対象として、代表的には子どもが考えられているが、障害をもつ人や老人、さらには一時的にその可能性を失っている状態にある人々（疲れている大人、落胆して元気を失った人など）や、動植物も含められる。そして養護性は、養育者としての成人だけがもつのではなくて、幼児期からそれを発達させていくものと考えられる。」と述べている。

養護性を育む要因として、小嶋は、「年齢、性別、子ども時代の母親との間に形成された愛着関係（兄弟・仲間関係などの）対人関係、性別役割観、（幼い子ども、老人、病人、障がいをもつ人々、動植物との接触経験などの）養護経験など」を挙げている。

5) 「親(性)準備性」について

岩田ら³⁶⁾と井上ら³⁷⁾が、「『親準備性』とは、望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味している。」と定義している。そして、「具体的には、望ましい結婚生活と育児行動を成立・維持させるような、異性観、結婚観、性別役割観にはじまり、子どもの受け入れに関わる態度（親としてのアイデンティティの準備状態）、健康な子ども・親や育児知識や技能の習得度など、多くの領域から構成される」と述べている。

井上ら³⁸⁾は、さらに「親準備性の形成に影響を与える要因として、①両親から愛されたという記憶で占められている子ども時代、②心理的安定感のある家庭で育った体験、③親が同一化の対象たり得ること、④健康な異性への関心と対異性行動の存在、⑤安定した性別役割感と性別役割の受容」を挙げている。井上らは、その研究の中で、若い世代に健康な親行

動を育み出そうとするなら、まずその親たちが子どもにとって安定した温かい家庭を築き、その中で十分な子育てをしていくことの重要性を示唆している。

6) 「次世代育成力」について

原³⁹⁾は、種としてのヒトが各社会単位、ないしは種全体として次世代を育てていく能力確保という意味で、次世代育成力という用語を提言している。そして、「『男性による』とか『女性による』という対立を超えて、人々が共に考え、共に尊重し合いながら、次世代へものごとを引き継いでいくという願いがこめられていて、家族を超えた人と人との絆の中で子どもが育つという現象も含まれる。世代から世代への継承に際して、男であるか女であるかが状況への参加に対する決定的分かれ目になるといったことのない社会を構築しつつ、ヒトが一人ひとり自らの心とからだを大切にしていきたいとの願いをこめたい。」と述べている。

VI. 考察

1. 各用語の概念の特徴と著者らが考える親性の概念視点との共通点・相違点

「親性」の概念については、与謝野晶子が1921年に、親としての精神は同一であるという観点から人間性の表現と述べていることは非常に興味深い。また、汐見と糸魚川は、親であることとその立場の理解という親役割観の認識の重要性を述べていることは、親としての理解を深める上で重要なキーワードになると考える。谷向は、「親性」を、親として子どもに対して慈しみ育もうとする特性として捉えていることと、性別や年齢に関係なく、子の親であるかどうかに限らないとする点は、現在の多様化する家族形態や育児支援の現状を考えると理解しやすい。「親性」の概念の構成要素として親役割観だけではなく、子どもへの感情や認識も考えていく必要があるというこれらの点は筆者らが考える「親性」概念の3)の視点と共通する。

さらに、谷向と林が述べているように、親をひと

りの人間として生涯発達の見点から捉え、人間の能力の一方の進歩・向上・獲得を示す変化だけではなく、親としての成長は、停滞や退歩も含みながら変化していく発達として捉えていくことが重要であるという点は著者らが考える親性概念の4)の見点と共通する。

「育児性」の概念については、大日向の性差を超えて子どもを育てるという見点は、汐見や糸魚川、谷向らの「親性」の概念提示と共通する内容であるが、その用語のとおり、育児期に焦点があてられたものであり、育児期以降の親としての特性を含むことに限界がある。著者らが提唱する「親性」という用語は、子どもの年齢に制限されない親の特性を捉えることができると思う。

「養育性」「養護性」の概念については、養育、養護する対象者への共感性と理解に焦点があてられており、妊娠・出産・育児の経験を通じて発達するという特性について述べていることは他の用語の概念に追随し、著者らが考える親性概念の4)の見点とも共通する。また、養護性については、誰でも持っているものであり、対象となる人は、子どもだけではないという点は、人間の基本的欲求を根拠とする考えであり、著者らが考える親性概念の1)の見点と共通すると思う。

「親(性)準備性」の概念については、青年期を対象として、親役割獲得以前の価値観や心理・行動・知識的側面の準備状態について述べられているが、これは「養護性」の誰もがもつ特性と共通するものである。

「次世代育成力」の概念については、次世代の育成について、個人や家族の特性と責任に頼るのではなく、社会全体の能力としての捉え方が特徴となる。これは、Eriksonが提唱する「世代性(generativity)」⁴⁰⁾⁴¹⁾の概念にも共通する内容であると思う。つまり個人の自我を超える世代間の連関をも問題にしているということである。この用語は社会的支援に関わる世代のつながりに着目しており、個人の成長・発達としての特性を表す他の用語とは

焦点とするレベルが異なると思う。

2. 親性概念と明確化の意義

これらのことをふまえ、筆者らは親性の概念を、「親性とは、すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者(子ども)に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力が発揮される。」と定義した。父親は、妊娠・出産を直接的に体験するわけではないが、妊娠期・出産期・育児期の全期を通じて妻と子どもをいたわり、子どもの保護と育成についても親としての役割を担い、その能力を十分発揮できると思う。

VII. 今後の研究の可能性と意義

今後は、各ライフステージの親性を把握するために、親性の構成概念の提示と尺度の開発により、親理解が深まり、看護支援の方向性を示唆することが可能であると思う。例えば妊娠・出産・育児期の親性の変化を捉えることで、親になることの過程を把握することができ、どの時期にどのような看護支援が必要となるのか明らかにすることができる。

さらに、病気や障害をもつ子どもの親、ステップファミリーの親、ひとり親など様々な問題を抱える親の「親性」を把握することで、家族に対する具体的な看護支援を提示できると思う。

VIII. 結論

伝統的性別役割分業観に基づく「母性・父性」をふまえた、女性にも男性にも共通する親役割観や子どもへの感情を含む特性を表す用語として著者らは「親性」に着目し、1)人間としての基本的欲求に基づき、すべての人がもっているものである、2)女性と男性に共通するものである、3)自己に対するものと、子どもに対するものとの2方向性で捉える、

4) ライフステージとともに発達していくものである, という4つの視点をもち, 「親性」「育児性」「養育性」「養護性」「親(性)準備性」「次世代育成力」について国内の文献検討を行い, 親性概念を提示した. そして, 「親性とは, すべての人がもっているものであり, 女性と男性に共通する, 自己を愛し, 尊重しながら, 他者(子ども)に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である. ライフステージとともに発達していくものであり, 妊娠・出産・育児期では, 子どもに対して保護や育成という能力で発揮される。」と定義した.

〔受付 '08.03.23〕
〔採用 '09.01.10〕

文 献

- 1) 厚生労働省 大臣官房統計情報部:人口動態統計, 2008
- 2) 共生社会政策統括官:少子化対策・高齢社会対策, 平成16年版 少子化社会白書, 内閣府
- 3) 永久ひさ子:(有賀美和子, 篠目清美編), 親子関係のゆくえ, 39-67, 頸草書房, 東京, 2004
- 4) 浅野みどり:(山崎嘉久, 前田清, 白石淑江編), ふだんのかかりから始める子ども虐待防止&対応マニュアル, 24-25, 71-75, 診断と治療社, 東京, 2006
- 5) 日本看護協会:看護職による子どもの虐待予防と早期発見, 支援に関する指針, 2002
- 6) 岩上真珠著:ライフコースとジェンダーで読む家族, 3-5, 有斐閣コンパクト, 東京, 2003
- 7) Bem, S.:The measurement of psychological androgyny, *Jornal of Counseling and Clinical Psychology*, 42:155-162, 1974
- 8) 高野陽, 窪龍子:父性の発達-新しい家族づくり-, 7-22, 家政教育者, 東京, 1994
- 9) 内藤和美:女性学を学ぶ, 121-123, 三一書房, 東京, 1994
- 10) 前掲3,)11-13, 201-203
- 11) 新村出編:広辞苑第五版, 岩波書店, 東京, 2002
- 12) Deutsch, H.:*Psychology of Woman*, Vol. 2. Grune and Stratton, 1945, 懸田克躬, 原百代訳:母性のきざし 母親の心理1, 日本教文社, 東京, 1944
- 13) 岩上真珠:ライフコースとジェンダーで読む家族, 138-140, 有斐各, 東京, 2003
- 14) 男女共同参画社会基本法:法律第78号, 平成11年6月23日
- 15) 柏木恵子:(柏木恵子編), 父親の発達心理学 父性の現在とその周辺, 86-132, 川島書店, 東京, 1990
- 16) 柏木恵子:根ヶ山光一編, 母性と父性の人間科学, 135-159, コロナ社, 東京, 2001
- 17) 神川晃, 稲見誠, 田宮貞和, 他:父性, 母性に関する意識調査, 日本小児科医会会報, 27:113-116, 2004
- 18) Murray, H.A.:*Exploration in personality*, Oxford University Press, 1938
- 19) Rubin, R.:*Maternal identity and the maternal experience*, Spring Publishing Company, 1984, 新道幸恵, 後藤桂子訳:母性論:母性の主観的体験, 1-13, 117-128, 医学書院, 東京, 1997
- 20) Walker, L.O. Crain, H. Thompson, E.:*Maternal Role attainment and Identity in the postpartum period:Stability and change*, *Nursing Research*, 35(2):68-71, 1986
- 21) Grossmann, f.K., Pollack, W.S. & Golging, E.:*Fathers and children, Predicting the quality and quantity of fathering*, *Developmental Psychology*, 24:82-91, 1988
- 22) 服部祥子:生涯人間発達論, 1-12, 医学書院, 東京, 2003
- 23) 与謝野晶子:人間礼拝, 天佑社, 1921, 与謝野晶子評論集, 334-345, 岩波文庫, 東京, 1985
- 24) 汐見稔幸:父親と育児, 母子保健情報, 20:48-50, 1989
- 25) 汐見稔幸:母性, 父性から親性へ, 母子保健情報, 36:10-13, 1997
- 26) 糸魚川直祐:柏木恵子編, 父親の発達心理学 父性の現在とその周辺, 148-150, 川島書店, 東京, 1999
- 27) 谷向みつえ:(小林芳郎監修), 子どもと保育の心理学, 210-214, 保育出版社, 大阪市, 2004
- 28) 林昭志:親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み, 上田女子短期大学紀要, 28:11-18, 2005
- 29) 林昭志:親を生涯発達の観点から捉える試み-乳幼児期の親の発達について-, 上田女子短期大学紀要, 29:1-9, 2006
- 30) 大日向雅美:(佐々木保行編), 母性を問い直すとき 育児ノイローゼ, 131-154, 有斐閣, 東京, 1982
- 31) 大日向雅美:日本家族心理学会編, 新しい家族の誕生と創造, 家族心理学年報, 9, 25-38, 金子書房, 東京, 1991
- 32) 鮫島雅子:「母性」「父性」に類似する用語の検討 心理的側面の研究における概念規定への試み, 鹿児島純心女性大学看護学部紀要, 3:80-92, 1998
- 33) 松岡恵:母子・父子関係の形成と夫婦関係の再構築への援助, *ペリネイタルケア 新春増刊*:57-64, 1998
- 34) 小嶋秀夫:発達心理学事典, 674, ミネルヴァ書房, 京都, 1996
- 35) 小嶋秀夫:親となる過程の理解 母性の心理・社会学, 95, 医学書院, 東京, 1991
- 36) 岩田崇, 秋山泰子, 井上義朗, 他:青年期の親準備性の関する研究, 厚生省心身障害研究報告書:466-467, 1982
- 37) 井上義朗, 深谷和子, 岩田崇他:青年の親準備性に関する研究(2), 厚生省心身障害研究報告書:261-267, 1982
- 38) 井上義郎, 深谷和子:青年の親準備性をめぐって, *周産期医学*, 13:2249-2252, 1983
- 39) 原ひろ子:原ひろ子, 館かおる編, 母性から産み育てる社会のために次世代育成力へ, 305-330, 新曜社, 東京, 1991
- 40) Erikson, E.H.:*Psychological issues:Identity and the life cycle*, International University Press, 1959, 小此木啓吾訳:自我同一性, 誠信書房, 1973
- 41) 小嶋秀夫, 速水敏彦, 本城秀次編:人間発達と心理学, 110-111, 金子書房, 東京, 2000

Literature in Japan on “Parenthood” and Similar Words
— Aiming at Clarification of the “Parenthood” Concept —

Yukimi Ohashi¹⁾ Midori Asano²⁾

1)Nagoya University Graduate School of Medicine

2)Nagoya University School of Health Science

Key words: Parenthood, Parenting, Nurturance, Pro-parenthood, Next generation upbringing

The words “motherhood” and “fatherhood” have traditionally been used to express parental mental states such as role awareness as a parent, and parental feelings to children. These words have also been used to express the relationship between a parent and a child. However, these terms are based on gender. More recently, gender-free terms such as “parenthood (oyasei)”, “parenting (ikujisei)”, “nurturance (youikusei, or yougosei)”, “pro-parenthood (oyajyunbisei)”, “next generation upbringing (jisedaikuseiryoku)” have begun to be used. These terms also suffer, however, from being applicable only to be unclear in meaning. Thus, the concepts of these words have not been widely accepted until now. In order to establish a generalized, gender-free concept of the “parenthood (oyasei)”, we investigated the usage of above terms in the literature published in Japan. Accordingly, we propose that “parenthood (oyasei)” be defined based on its following characteristics. Parenthood is based on a basic desire as a human being that any individual possesses. Parenthood is common to females and males. Parenthood is bi-directional love and respect, both towards the parent oneself and towards its child. Parenthood develops as the life stages proceed. In the context of the pregnancy/the delivery/the child care period, parenthood is achieved by a parent’s ability to protect and raise its children.